

4.5 正規直交基底

• 正規直交基底 •

正規直交系 m 個のベクトル $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$ が

$$\mathbf{a}_i \cdot \mathbf{a}_j = \delta_{ij} \quad (\text{クロネッカーのデルタ})$$

をみたすとき $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$ を正規直交系であるという. 正規直交系は 1 次独立である.

正規直交基底 基底が正規直交系するとき正規直交基底という. 計量ベクトル空間 V は正規直交基底をもつ. \mathbf{R}^n の標準的な基底 $\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2, \dots, \mathbf{e}_n$ は正規直交基底である. $\mathcal{B} = \{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m\}$ ($m = \dim V$) を V の正規直交基底とする.

$$\mathbf{a} = (x_1, x_2, \dots, x_m)_{\mathcal{B}}, \quad \mathbf{b} = (y_1, y_2, \dots, y_m)_{\mathcal{B}}$$

を V のベクトル \mathbf{a}, \mathbf{b} の \mathcal{B} に関する成分とすると, 内積は自然な内積のときと同じことになる. すなわち

$$\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = x_1 y_1 + x_2 y_2 + \dots + x_m y_m$$

グラム・シュミットの直交化法 V の基底 $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_m$ ($m = \dim V$) からつぎの手順によって正規直交基底 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$ を作る方法をグラム・シュミットの直交化法という.

$$\mathbf{y}_1 = \mathbf{x}_1$$

$$\mathbf{a}_1 = \frac{\mathbf{y}_1}{|\mathbf{y}_1|}$$

$$\mathbf{y}_2 = \mathbf{x}_2 - (\mathbf{x}_2 \cdot \mathbf{a}_1)\mathbf{a}_1$$

$$\mathbf{a}_2 = \frac{\mathbf{y}_2}{|\mathbf{y}_2|}$$

$$\mathbf{y}_3 = \mathbf{x}_3 - (\mathbf{x}_3 \cdot \mathbf{a}_1)\mathbf{a}_1 - (\mathbf{x}_3 \cdot \mathbf{a}_2)\mathbf{a}_2$$

$$\mathbf{a}_3 = \frac{\mathbf{y}_3}{|\mathbf{y}_3|}$$

...

...

$$\mathbf{y}_m = \mathbf{x}_m - (\mathbf{x}_m \cdot \mathbf{a}_1)\mathbf{a}_1 - (\mathbf{x}_m \cdot \mathbf{a}_2)\mathbf{a}_2 - \dots - (\mathbf{x}_m \cdot \mathbf{a}_{m-1})\mathbf{a}_{m-1} \quad \mathbf{a}_m = \frac{\mathbf{y}_m}{|\mathbf{y}_m|}$$

正規直交基底の補充 (取り替え) 定理 $\dim V = m$ とする. $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_d$ を正規直交系とすると, $m-d$ 個の V のベクトル $\mathbf{a}_{d+1}, \mathbf{a}_{d+2}, \dots, \mathbf{a}_m$ を選んで, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_d, \mathbf{a}_{d+1}, \mathbf{a}_{d+2}, \dots, \mathbf{a}_m$ を V の正規直交基底であるようにすることができる.

• 2組の正規直交基底の関係 • $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$ を V の正規直交基底, $\mathbf{a}'_1, \mathbf{a}'_2, \dots, \mathbf{a}'_m$ を V のベクトルとし

$$\mathbf{a}'_j = p_{1j}\mathbf{a}_1 + p_{2j}\mathbf{a}_2 + \dots + p_{mj}\mathbf{a}_m \quad (j = 1, 2, \dots, m)$$

とする. このとき

$$\mathbf{a}'_1, \mathbf{a}'_2, \dots, \mathbf{a}'_m \text{ が正規直交基底} \iff P = [p_{ij}] \text{ が } m \text{ 次直交行列} \quad ({}^t P P = E)$$

例題 13 直交行列

(a) 2 次の正方行列 $P = [\mathbf{x}_1 \ \mathbf{x}_2]$ が直交行列であるための必要十分条件は $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2$ が互いに直交する単位ベクトル (\mathbf{R}^2 の正規直交基底) であることを示せ.

(b) $\begin{bmatrix} a & -1/2 \\ 1/2 & b \end{bmatrix}$ が直交行列であるとき, a, b を求めよ.

【解答】 (a) P が直交行列 (${}^t P P = E$) であると

$${}^t P P = \begin{bmatrix} {}^t \mathbf{x}_1 \\ {}^t \mathbf{x}_2 \end{bmatrix} [\mathbf{x}_1 \ \mathbf{x}_2] = \begin{bmatrix} {}^t \mathbf{x}_1 \mathbf{x}_1 & {}^t \mathbf{x}_1 \mathbf{x}_2 \\ {}^t \mathbf{x}_2 \mathbf{x}_1 & {}^t \mathbf{x}_2 \mathbf{x}_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}$$

から

$${}^t \mathbf{x}_1 \mathbf{x}_1 = |\mathbf{x}_1|^2 = 1, \quad {}^t \mathbf{x}_1 \mathbf{x}_2 = \mathbf{x}_1 \cdot \mathbf{x}_2 = 0, \quad {}^t \mathbf{x}_2 \mathbf{x}_2 = |\mathbf{x}_2|^2 = 1$$

だから $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2$ は互いに直交する単位ベクトルである.

逆に, $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2$ が互いに直交する単位ベクトルなら $P = [\mathbf{x}_1 \ \mathbf{x}_2]$ は ${}^t P P = E$ をみたすから直交行列である.

(b) (a) から

$$a^2 + (1/2)^2 = 1, \quad -a/2 + b/2 = 0, \quad (-1/2)^2 + b^2 = 1$$

だから

$$a = b = \pm \sqrt{3}/2$$

である.

【注意】 直交行列 P の行ベクトルも互いに直交する単位ベクトルである. 一般に n 次の直交行列の列 (行) ベクトルは互いに直交する単位ベクトル (\mathbf{R}^n の正規直交基底) である.

問題

13.1 つぎの行列が直交行列であるように a, b, c, d を定めよ.

$$(a) \begin{bmatrix} 1/\sqrt{2} & a \\ b & -1/\sqrt{2} \end{bmatrix} \quad (b) \begin{bmatrix} 1/\sqrt{6} & 1/\sqrt{3} & a \\ 2/\sqrt{6} & -1/\sqrt{3} & b \\ 1/\sqrt{6} & 1/\sqrt{3} & c \end{bmatrix}$$

$$(c) \begin{bmatrix} 5/13 & a & 0 \\ b & -5/13 & c \\ d & 0 & 1 \end{bmatrix}$$

13.2 2 次の直交行列 P は $P = \begin{bmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{bmatrix}$, または $P = \begin{bmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & -\cos \theta \end{bmatrix}$,

($0 \leq \theta < 2\pi$) であることを示せ.

4.2 偏導関数

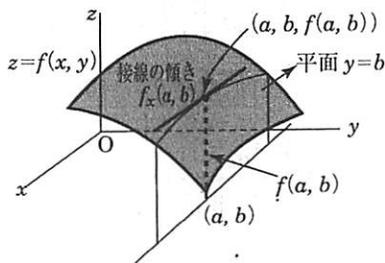
●**偏微分可能性**● (a, b) を含む領域 D で定義された関数 $f(x, y)$ で, $y = b$ とおいて得られる x の関数 $f(x, b)$ が $x = a$ で微分可能のとき, $f(x, y)$ は点 (a, b) で x に関して偏微分可能であるといつて, その微分係数

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a+h, b) - f(a, b)}{h}$$

を点 (a, b) における x に関する偏微分係数という. 記号で

$$f_x(a, b), \quad \frac{\partial f(a, b)}{\partial x}, \quad \frac{\partial}{\partial x} f(a, b)$$

などで表す. これは $z = f(x, y)$ の表す曲面を, 平面 $y = b$ で切ったときの切り口の曲線上の点 $(a, b, f(a, b))$ における接線の傾きを表す(右図を参照).



同様に, 点 (a, b) における $f(x, y)$ の y に関する偏微分係数

$$f_y(a, b), \quad \frac{\partial f(a, b)}{\partial y}, \quad \frac{\partial}{\partial y} f(a, b)$$

が定義できる.

偏導関数 領域 D の各点 (x, y) に対し, その点における $z = f(x, y)$ の x に関する偏微分係数 $f_x(x, y)$ を対応させる関数を x に関する偏導関数といつて,

$$f_x(x, y), \quad \frac{\partial f(x, y)}{\partial x}, \quad \frac{\partial}{\partial x} f(x, y), \quad \frac{\partial z}{\partial x}, \quad z_x$$

などと書く. y に関する偏導関数

$$f_y(x, y), \quad \frac{\partial f(x, y)}{\partial y}, \quad \frac{\partial}{\partial y} f(x, y), \quad \frac{\partial z}{\partial y}, \quad z_y$$

も同様に定義される. 一般に, 2変数の関数 $f(x, y)$ に対してその偏導関数を求めることを, $f(x, y)$ を x あるいは y についても偏微分するという.

●**全微分可能性**● 関数 $f(x, y)$ が点 (x, y) で全微分可能であるとは, x, y の増分 h, k に対して, h, k に無関係な数 A, B (x, y には関係する) が存在して

$$f(x+h, y+k) - f(x, y) = Ah + Bk + \varepsilon \sqrt{h^2 + k^2}$$

$$\varepsilon \rightarrow 0 \quad (h \rightarrow 0, k \rightarrow 0)$$

となるときである. $df = Ah + Bk$ をその点における f の全微分という.

つぎに領域 D の各点で全微分可能のとき領域 D で全微分可能という.

定理6 (全微分可能性と偏微分可能性) 関数 $f(x, y)$ が点 $(x, y) \in D$ で全微分可能ならば $f(x, y)$ はその点で偏微分可能であり,

$$df = f_x(x, y)h + f_y(x, y)k$$

一般に「偏微分可能 \Rightarrow 全微分可能」, 「偏微分可能 \Rightarrow 連続」, 「連続 \Rightarrow 全微分可能」は成立しない. それらの例はそれぞれ「p. 73の例題4」, 「p. 73の問題4.1, p. 69の問題2.1(3)」および「p. 69の問題2.1(1), p. 73の例題4」などである.

定理7 (全微分可能性) 関数 $f(x, y)$ が領域 D で偏微分可能で, $f_x(x, y), f_y(x, y)$ が D で連続ならば, $f(x, y)$ は D で全微分可能である.

定理8 (全微分可能性と連続性) 関数 $f(x, y)$ が点 $(x, y) \in D$ で全微分可能ならば連続である.

●**合成関数の偏微分法**●

定理9 (合成関数の微分) 関数 $z = f(u, v)$ が全微分可能で, $u = \varphi(t), v = \psi(t)$ が微分可能ならば

$$\frac{dz}{dt} = \frac{\partial z}{\partial u} \frac{du}{dt} + \frac{\partial z}{\partial v} \frac{dv}{dt}$$

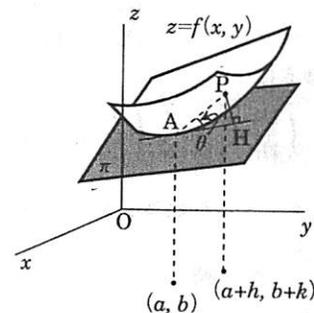
$u = \varphi(x, y), v = \psi(x, y)$ が偏微分可能ならば

$$\frac{\partial z}{\partial x} = \frac{\partial z}{\partial u} \frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial z}{\partial v} \frac{\partial v}{\partial x}, \quad \frac{\partial z}{\partial y} = \frac{\partial z}{\partial u} \frac{\partial u}{\partial y} + \frac{\partial z}{\partial v} \frac{\partial v}{\partial y}$$

●**接平面**● 曲面 $z = f(x, y)$ 上の点 A を通る平面 π について, 曲面上の点 P から平面 π におろした垂線の足を H , AP と AH とのなす角を θ とするとき, $\theta \rightarrow 0$ ($P \rightarrow A$) ならば, π を点 A におけるこの曲面の接平面という.

定理10 (接平面の方程式) 関数 $z = f(x, y)$ が点 (a, b) で全微分可能ならば, 点 $(a, b, f(a, b))$ における接平面の方程式は

$$z - f(a, b) = f_x(a, b)(x - a) + f_y(a, b)(y - b)$$



〔2〕

(1) 命題「 $p \Rightarrow q$ 」が真であるとは、条件 p を満たすものはすべて条件 q を満たすことであるから、

① $P \subset Q$

(2) 命題「 $p \Rightarrow q$ 」の逆は「 $p \Leftarrow q$ 」であるから、この逆の命題が真であることと

② $P \supset Q$

が成り立つこととは同じである。

(3) 条件 \bar{p} を満たす要素の集合は P の補集合 \bar{P} であるから、命題「 $\bar{p} \Rightarrow q$ 」が真であることと

③ $\bar{P} \subset Q$

が成り立つこととは同じである。また、このとき対偶命題「 $p \Leftarrow \bar{q}$ 」も真であるから、

④ $P \supset \bar{Q}$

が成り立つことも同じである。

(4) すべての自然数が条件「 \bar{p} または q 」を満たすということは、 $U = \bar{P} \cup Q$ が成り立つことである。

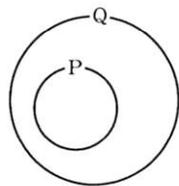
よって、

$$\begin{aligned} \bar{U} &= \overline{\bar{P} \cup Q} \\ \phi &= P \cap \bar{Q} \end{aligned}$$

したがって、

⑤ $P \subset Q$

が成り立つことと同じである。



←

←

命題 $p \Rightarrow q$ に対して、
 $q \Rightarrow p$ を逆、
 $\bar{p} \Rightarrow \bar{q}$ を裏、
 $\bar{q} \Rightarrow \bar{p}$ を対偶

という。

← $\bar{p} = p$.

← ある命題とその対偶命題の真偽は一致。

← ド・モルガンの法則

$$\begin{aligned} \overline{A \cup B} &= \bar{A} \cap \bar{B} \\ \overline{A \cap B} &= \bar{A} \cup \bar{B} \end{aligned}$$

第2問 2次関数

大学入試センター試験過去問レビュー
 数学I・A、II・B(河合出版, 2010)

G_1 が点 $(2, 1)$ を通るとき、

$$1 = 4a + 2b + c$$

が成り立つから、

$$c = \boxed{-4}a - \boxed{2}b + \boxed{1} \quad \dots \textcircled{1}$$

であり、 G_2 が $(-3, 1)$ を通るとき、

$$1 = -9a - 3b + d$$

が成り立つから、

$$d = \boxed{9}a + \boxed{3}b + \boxed{1} \quad \dots \textcircled{2}$$

である。

G_1 の頂点は

$$\begin{aligned} y &= ax^2 + bx + c \\ &= a\left(x + \frac{b}{2a}\right)^2 + c - \frac{b^2}{4a} \end{aligned}$$

から、

$$\left(-\frac{b}{2a}, c - \frac{b^2}{4a}\right) \quad \dots \textcircled{3}$$

一方、 G_2 の頂点は

$$\begin{aligned} y &= -ax^2 + bx + d \\ &= -a\left(x - \frac{b}{2a}\right)^2 + d + \frac{b^2}{4a} \end{aligned}$$

から、

$$\left(\frac{b}{2a}, d + \frac{b^2}{4a}\right) \quad \dots \textcircled{4}$$

G_1 の頂点と G_2 の頂点が原点に関して対称であるとき、
 ③、④から、

$$\begin{aligned} c - \frac{b^2}{4a} &= -\left(d + \frac{b^2}{4a}\right) \\ c &= -d \end{aligned}$$

が成り立つから、①、②を用いて、

$$-4a - 2b + 1 = -(9a + 3b + 1)$$

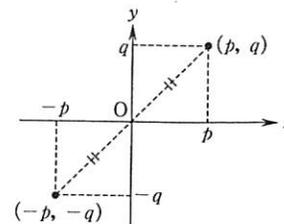
$$b = \boxed{-5}a - \boxed{2} \quad \dots \textcircled{5}$$

が成り立つ。ここで、 G_1 の頂点を点 (p, q) とすると、③から、

$$\begin{cases} p = -\frac{b}{2a}, \\ q = c - \frac{b^2}{4a}. \end{cases}$$

← $y = k(x-p)^2 + q$ ($k \neq 0$) の形に変形する。このとき、頂点の座標は、
 (p, q) .

← 2点 (p, q) , $(-p, -q)$ は原点に関して対称。



⑤を用いて,

$$p = \frac{-5a-2}{2a} = \frac{\boxed{5}}{\boxed{2}} + \frac{1}{a},$$

①, ⑤を用いて,

$$\begin{aligned} q &= -4a - 2(-5a-2) + 1 - \frac{(-5a-2)^2}{4a} \\ &= 6a + 5 - \frac{25a^2 + 20a + 4}{4a} \\ &= -\frac{a}{\boxed{1}} - \frac{1}{a} \end{aligned}$$

であり,

$$p+q = \frac{5}{2} - \frac{a}{4} \quad \dots \textcircled{6}$$

となる.

G_1 の頂点 (p, q) が直線 $y = -x + 2$ 上にあるならば,

$$q = -p + 2$$

すなわち,

$$p+q = 2 \quad \dots \textcircled{7}$$

が成り立つので, ⑥, ⑦より,

$$\frac{5}{2} - \frac{a}{4} = 2$$

$$a = \boxed{2}$$

となり, このとき, ⑤より,

$$b = -5 \cdot 2 - 2 = -12.$$

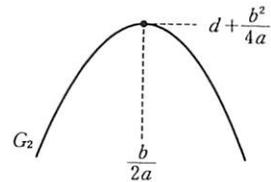
②より,

$$d = 9 \cdot 2 + 3 \cdot (-12) + 1 = -17$$

であるから, G_2 を表す2次関数の最大値は

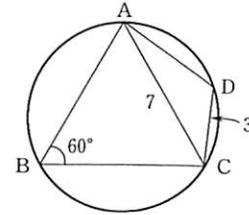
$$\begin{aligned} d + \frac{b^2}{4a} &= -17 + \frac{(-12)^2}{4 \cdot 2} \\ &= \boxed{1} \end{aligned}$$

である.



G_2 は上に凸の放物線だから頂点で最大となる.

第3問 図形と計量・平面図形



四角形 ABCD は円に内接しているから,

$$\angle ABC + \angle ADC = 180^\circ$$

が成り立ち, $\angle ABC = 60^\circ$ であるから,

$$\angle ADC = \boxed{120}^\circ$$

であり, $AD = x$ とおき, 三角形 ADC に余弦定理を用いると,

$$AC^2 = AD^2 + CD^2 - 2 \cdot AD \cdot CD \cdot \cos 120^\circ$$

$$7^2 = x^2 + 3^2 - 2 \cdot x \cdot 3 \cdot \left(-\frac{1}{2}\right).$$

整理して,

$$x^2 + 3x - 40 = 0$$

$$(x+8)(x-5) = 0.$$

$x > 0$ より,

$$x = AD = \boxed{5}$$

となる. したがって, 三角形 ADC の面積は,

$$\frac{1}{2} \cdot AD \cdot CD \cdot \sin 120^\circ = \frac{1}{2} \cdot 5 \cdot 3 \cdot \sin 120^\circ. \quad \dots \textcircled{1}$$

一方, 三角形 ADC の面積は

$$\frac{1}{2} \cdot AC \cdot CD \cdot \sin \angle ACD = \frac{1}{2} \cdot 7 \cdot 3 \cdot \sin \angle ACD \quad \dots \textcircled{2}$$

とも表せるから, ①, ②より,

$$\frac{1}{2} \cdot 5 \cdot 3 \cdot \sin 120^\circ = \frac{1}{2} \cdot 7 \cdot 3 \cdot \sin \angle ACD$$

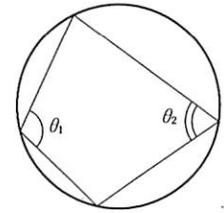
より,

$$\sin \angle ACD = \frac{\boxed{5}}{\boxed{11}} \sqrt{\boxed{3}}$$

である.

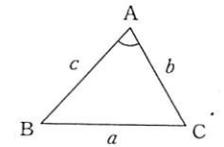
(別解) 三角形 ADC に余弦定理を用いて,

円に内接する四角形の性質



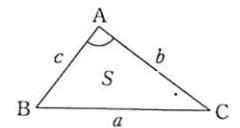
$$\theta_1 + \theta_2 = 180^\circ.$$

余弦定理



$$a^2 = b^2 + c^2 - 2bc \cos A.$$

三角形の面積



$$S = \frac{1}{2} bc \sin A.$$